

# 「イノベーション探究Ⅰ」～地域再発見プログラム～ 第1回

## 1. 実施日

令和3年4月24日(土) 1・2限

## 2. 場所

講堂(2クラス合同実施)

## 3. 対象

グローバル科1年生(6・7組)

## 4. 講師

鳥羽高等学校 教諭 6組 山中 脩平 中村 啓介  
7組 金本 瑞穂 矢野 和久



## 5. 内容

準備物

### ガイダンス・趣旨説明

#### (1) アイスブレイク

- ①内 容：番号が記入されたシール(赤・青・黄・白)を使ったゲーム
- ②ルール：a 話すことなしに色ごとにグループを作り番号順に揃ったら座る  
b 一方のクラスより先に全員が座れたクラスが勝ち
- ③手 順：a 指導者が口頭で一切しゃべらないことを指示  
b 指導者以外の担当で生徒の背中にシールを貼る  
c プレゼン資料で以下の順に指示  
「クラス対抗」→「色別に集合し番号順に整列する」  
→「集合できしだい座る」→「全員が早く座ったクラスの勝ち」  
→「では、スタート」
- ④学 び：a ルールを守る  
b リーダーシップを発揮する  
c 各自が役割を果たす  
d 協働する  
e ノンバーバルコミュニケーションをとおして、コミュニケーション=協働の重要性を体感する

#### (2) 趣旨説明

##### ①グローバル・リーダーについて

人物像：長い歴史の中で紡ぎ受け継がれてきた智恵や価値を生かしつつ、多文化協働をとおして、人類共通の新たな価値と持続可能なよりよい未来社会を創造できる人材

資質・能力：

- 歴史をとおして世界を俯瞰する力
- 多様な文化的背景を持つ人々と協働する力
- 科学的に思考・吟味する力
- 新たな価値を創造する力
- 課題解決の枠組みをデザインする力
- 困難な状況を突破する力

##### ②探究とは

「巨人の肩に立つ」を題材に概要を説明



③「イノベーション探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」について

1年生は地域発見プログラムとして「京の智の再発見」をテーマに探究活動を行う。

2年生はグローバル・ジャスティスプログラムとして「グローバル・イシュー」をテーマに探究活動を行う。

3年生は、2年生の探究の成果を英語で発信する。

④「イノベーション探究Ⅰ」について

“京の智”の定義を行った。

(3) ワーク：「京都」を考える

目的…現時点での京都イメージを確認し、「京の智」に関するテーマ探しに役立てる

発表・報告し合う＝対話をとおして他者の見方に気付く

手法…KJ法、ワールドカフェ方式

①グループ編成後、30秒間自己紹介

②個人で京都の特長・課題をそれぞれ付箋に5つ記入する

③グループで付箋をA1用紙に貼る

→ジャンル別に分類し、分類したものにラベリングをする

→全体を表すタイトルをつける「〇〇な(の)都市(街・まち)・京都」

④発表及び参観、報告

・メンバーの1人が残り自分のグループでの議論の経過やタイトルについて発表する(2分)

・他のメンバー3人は、それぞれ別のグループの発表を聞きに行く

⑤自グループに戻った3人のメンバーは、聞いてきた発表についてグループ内で共有する(1分×3回)

6. 学び

(1) 地域社会を知ることは民主主義の基本であることを認識する。

(2) グローバル・イシューの解決というと、遠く離れているように感じるが、「京の智」から接近できると仮説を立てている。現状をふまえて自分達なりの答えを探し(＝現状探究)、対話をとおして「京の智」を再発見し、自己の変容を理解し、他者の気付きを促す。

(3) 現時点での自分たちの京都イメージを共有し、報告し合うことで、他者の見方に気付き、今後の「京の智」に関するテーマ探しに役立てる。

7. 次回への課題

最初のグループでの活動ということもあり、グループ間でコミュニケーション量に差があった。今後、協働的な学習方法についての指導を行い、各自がシェアリーダーシップの概念を理解して探究活動に取り組むことが出来る状態を目指していく。

8. 授業の振り返り

R2年度は、京都の特徴を付箋に記入する際に、多くの重複があった。例えば、“祇園祭”や“観光都市”、“大学が多い”などは、複数の生徒が記入していた。今年度はできるだけ重複がないように付箋を記入させ、多様な観点で京都について考えてほしかった。よって、説明時に付箋の重複ができるだけおきないように、自分らしい京都の特徴を記入するように促した。その結果、「優しい口調できつい事を言う」や「サイバー警察」などオリジナリティのある付箋を記入することができ、後の会話を促進することとなった。学習者は「〇〇な(の)都市(街・まち)・京都」とタイトルをつける活動に苦労していた。全体を俯瞰してグループ間の関連をとらえることができないようだった。その場で指導者が、あるグループの模造紙を例に、グループ間の関係を矢印で示しながらストーリーを持たせて説明をするなどして支援を行った。その結果、学習間の会話も促進され各グループでタイトルをつけることができた。iPad内の資料をAppleTVにミラーリングしてプロジェクターで白壁に投影した。その結果、広い講堂内を自由に歩きながら資料が提示できた。また、学習者のグループの模造紙や付箋をカメラで撮影して即自的に共有できた。行動内でグループ間の距離をとって活動をさせたの

で、他グループの情報を全体で共有できるように働きかける等した。